“MOKOMOKO・BORDER”（モコモコ・ボーダー）

栗原　針山

今日、SNSやAIの発達によって世界規模で瞬時に人が繋がれるようになりボーダーレス化が加速度的に進んできた。便利で良いことではある。しかし人の心は果たしてそこに追いついているのだろうか。例えばデマやフェイクニュースに対し吟味することなく乗っかり、あっという間に拡散してしまうこともある。そしてそれが時には誰かを自殺に追い込んだり命を左右することも増えている。本来踏みとどまるべきボーダーまで失われつつあるのだ。

ボーダーというと国境をイメージする人も多いかと思うが、ここで取り上げたいのは特に個々人の内面におけるボーダーである。だがそれは非常に複雑で繊細なものだ。マイナスに作用すれば人種差別などにもつながりかねない。だからこそ、今の時代に求められているのは短絡的な差別化としてのボーダーではなく、十分な葛藤の先にあるプラスの産物としてのボーダーではないだろうか。それは人間性の希薄化に歯止めをかけることにもなり、むしろ互いを表面的にではなく真に尊重しあえることにもつながるはずだ。

具体的に言えば、いったん立ち止まり相対する問題に葛藤を重ね、そのギリギリのボーダーに解決の糸口である煌めきを見出していくことだ。このアプローチを私は*MOKOMOKO*・BORDER（モコモコ・ボーダー）と称して書で表現している。葛藤の対立対象は自己の内面における二面性、個と全体性、あるいは生と死といった概念や普遍的なテーマにも及ぶ。“*MOKOMOKO*”（モコモコ）とは日本語で「次々と周囲より盛り上がった部分が生じるさま」を指す。1℃単位の温度調整や熟成などの独自の墨の作り方によって書する文字の一点一画をモコモコと滲ませ、そこに葛藤をはじめとした感情を投影する。文字そのものが元々もつ意味と相まって命が吹き込まれていく。そして線同士がモコモコとぶつかりせめぎ合った末、その狭間に実に微かな、だが確かなるボーダーが生まれ光を醸し出すのだ。それは結果としての余白やボーダーにこそ価値が生まれることの象徴でもある。このモコモコとした墨は今まさに膨らみつつあるように見えるので、生々しい永続性をもつことができるようになる。

人間は元来、葛藤する生き物であり切実に出口を探そうとする。その過程がシビアであればあるほどそこに残るボーダーはより実体をもった生きる煌めきとなり、本質的な存在意義を取り戻すことになる。そう、私の提唱するボーダーとは、誰もが抱える葛藤や苦悩の先にやがて訪れる確固たる一筋の救いの光であり明日を切り拓くものなのだ。

コロナ禍において図らずも閉ざされ足元を見つめ直すことの一端を感じる人も多かったかと思う。ポストコロナ時代に向け、混沌とした葛藤の先のボーダーの光をいかに見出していくのか、観る人がそれぞれの人生を重ねながら感じてもらえたら幸いである。

「押しつぶされそうな居場所」～〔居〕86×86cm　2019年（墨　紙　和額）

漢字〔居〕による作品。
様々なプレッシャーや圧力で息が詰まってしまう。首をへし折られそうに身動きができない状況だが、わずかな光があると信じたい。子供への虐待死事件が多発するなかで、居場所を切り口に制作した。

「もう一度立ち上がれるか」～〔モウイチド〕86×162cm　2019年（墨　紙　和額）

カタカナ〔モウイチド〕による作品。
自分自身もしくは他者との間で葛藤したりせめぎ合いながらもう一度立ち上がろうとしていく。湧き上がる力を原動力にできるだろうか。

「なぜなんだ」～〔問〕122×212cm　2020年（墨　紙　和額）

漢字〔問〕による作品。
歯を食いしばりながら絞り出す悲嘆にも近い想いである。そして逆に問われてもいるのである。今の人間の立ち位置を。

「路上に降り注ぐ様々な感情」～
〔「」「」「」「」〕152×111cm
2020年

カギかっこ「」4つによる作品。
路上には行きかう人々の様々な感情が降り注いでいる。喜怒哀楽それぞれが街の片隅に埋もれながら今日も当たり前に時が過ぎていく。降り積もった痕跡は雨に流されるのだろうか。声なき声を、セリフなきカギかっこに集約した表現。コロナ禍のロサンゼルスでの路上で感じたことがもとになっている。

「自画像2020」～〔自〕124×92cm
2020年（墨　紙　和額）

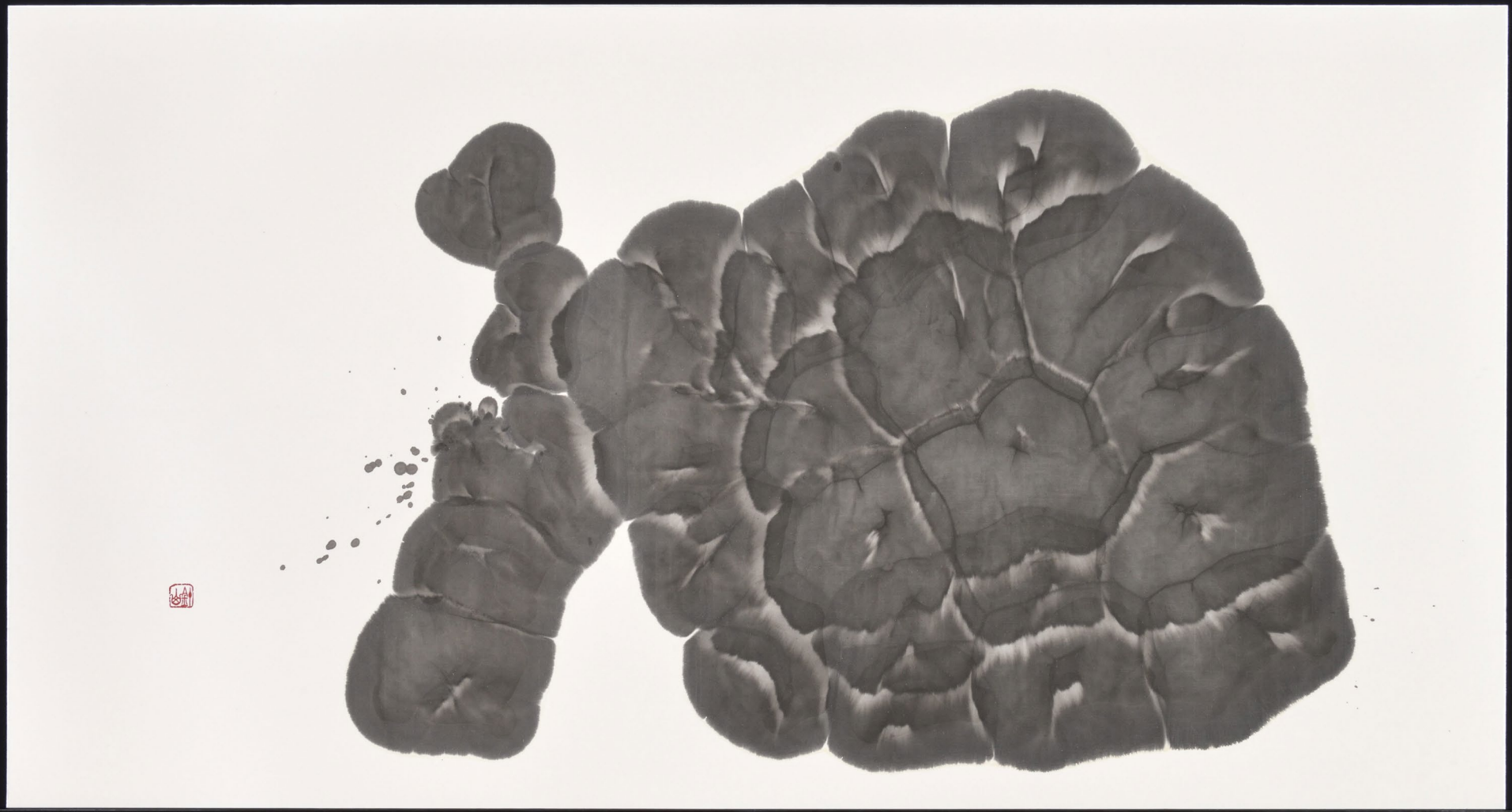
漢字〔自〕による作品。
絵画の世界では自画像はよくあるが、書の世界ではなかった。特に内面にスポットをあてた書による自画像である。重い葛藤をはじめとする暗闇のなか境界線も見えなくなっていく様子を表した。しかし光を失わずギリギリのところで耐えて踏み出していかねば。

「泰然とやるべきことをやるのみ」～〔然〕98×118cm　2020年（墨　紙　和額）

漢字〔然〕による作品。
揺るがず今やるべきことを粛々と。これは非日常であっても日常であっても同じである。心の中にしっかりと核となるものがあれば、どんな状況であれ歩みを止めずにやるべきことが見えてくるのではないだろうか。

「人間の人間たる所以」～〔人間〕162×86cm
2020年（墨　紙　和額）

漢字〔人間〕による作品。
生身の人間ならではの部分を詰め込んだ。時にギリギリのところでせめぎ合い、時につぶされながらも耐え抜く。それは他者との間でも自身の中でも同様である。良いところも悪いところも抱えながら脈々と流れる生の力の中で、字の中の余白は核となる命の灯として光っている。下部の滲み出る白く輝く部分は顔にも見えるだろう。例えば笑っているようにも卑屈になっているようにも見えるかもしれない。どのような表情を見出すかはその時の心情や置かれた状況によって変わるかと思う。これは生きる人間のありのままの姿そのものである。



「叫びの肖像」～〔口口口・・・〕113×198cm　2022年（紙　墨　和額）

漢字〔口〕の集合体による作品。
叫びとは何か。多数派と少数派もどちらの立場なのか。善悪や正義とは果たして。人間の在り方を問う。

「どん底でなお失われぬ生の煌めきがある」～〔生〕63×88cm　2022年（墨　紙　和額）

漢字〔生〕による作品。
堕ちた先の暗闇の中でも滲み出る生の煌めきは確かにそこにある。それは紛れもなく一筋の希望の輪郭でもある。

「愛するということ」～〔心 心〕93×60cm
2022年（墨　紙　和額）

漢字〔心 心〕による作品。
相手と時にぶつかり合いながらも互いの足りない部分を埋めながらかみ合っていく。だが全てがガチっとはまるのも窮屈だ。互いが干渉しない余白も必要。そこを尊重し合えるのが愛ではないだろうか。そしてそもそも何のための愛なのか、原点を見つめる。

「真の愛のために」～〔人 人〕49×64cm　2023年（墨　紙　和額）

漢字〔人 人〕によるシリーズ作品。
縦に“人 人”と書いているが、横に並んでいる人の姿にも見えるかもしれない。いろんな愛の形の中で、心を共有しながらも依存せず互いの間に一線を引くことこそが愛であり、そこに真の光が生まれると思う。個あってこその共生。距離感とは何かの問いかけでもある。

「自己との対峙ver.1」～〔一人〕
64×54cm　2023年（墨　紙　和額）

漢字〔一人〕による作品。シリーズ化する作品となるのでver.１に。

自分自身と真に向き合うとき、どうにもならない抑圧感のなかで光を見出そうとする。内外のなにかにとらわれながらも必死にあがいて足を踏み出そうとすれば、宿る光の確かさに気付くかもしれない。